

志比口と地蔵町口における屋敷地について* 福井城下の町口における屋敷地の研究 その5

伊豆蔵 庫喜^{*1}, 多米 淑人^{*2}, 吉田 純一^{*1}

The Study of the Residences in Shihi-guchi and the Jizomachi-guchi A Study on the Residences the Machi-kuchi in the Fukui Castle Town, part5

Kouki IZUKURA^{*1}, Yoshihito TAME^{*2} and Junichi YOSHIDA^{*1}

^{*1} FUT Fukui Castle and Castle Town Research Laboratory

This paper compares of the residences in Shihi-guchi and the Jizomachi-guchi. The Yoriki and Ashigaru lived in five towns through the Edo era. The three towns of Shihiguchi-Ikadocho, Okagocho, and Nishi-Ohatacho had Tradesman's land, Temples, and Samurai residences. The residence of the Matsuoka clan was in located Okobitocho from the *Shoho2 year* to the *kyouho6 year*. At the Jizomachi-guchi, there were three towns, Jizomachi, Okumachi, and Soto-Jizomachi. The three towns were also residential areas for lower Samurai such as Yoriki and Ashigaru. It was recognized that the ASHIDA Family's Shimoyashiki in Kochiseki was in located Soto Jizomachi, and that the number of Samurai residences was larger than that of the Kumiashiki at the end of the Edo period.

Key Words : 町口, 志比口, 地蔵町口, 組屋敷, 組町

1. はじめに

本研究は城下図や史料をもとに、福井城下から領内各地に通じる街道の出入り口にあたる13の町口⁽¹⁾付近に配されていた武家屋敷地や組屋敷⁽²⁾について検討する。これまで城下の北東端の加賀口、北西端の牧ノ島口と足羽川沿いにある明里口の屋敷地について報告した⁽³⁾。これによれば、加賀口は御先物頭の役宅とその配下の組屋敷を、明里口は御水主頭の役宅とその配下の組屋敷を配して警衛にあたっていたこと、牧ノ島口は万治2年(1659)の大火以降に寺町になったこと、そして3つの町口ともに江戸初期には上級武士に従仕する与力や足軽の組屋敷が町の大半を占めていたが、貞享3年(1686)の大法⁽⁴⁾以降、組屋敷は年代とともに減少し、中級武士の屋敷地が増加していることなどを指摘した。本稿は福井城下の東北部にある志比口と地蔵町口の屋敷地について報告する。

2. 城下絵図にみる志比口と地蔵町口の屋敷地

志比口は福井城下の東北部に位置し、福井城下から勝山に通じる勝山街道の町口にあたる。志比口付近には志比口筏町、御駕町、東御旗町、御小人町と西御旗町がある。これら5町の屋敷割は万治2年の大火前から慶応年間(1865～67)までの8枚の城下図⁽⁵⁾で確認できる。一方、地蔵町口は志比口の南方にあり、勝山に至る街道口にあたる。地蔵町口付近には地蔵町、奥町と外地蔵町がある。3町の屋敷割は志比口同様、8枚の城下図でわかる。

図1-1～図1-8の8図は、各時期の志比口と地蔵町口周辺を示したもので、8図にみられる屋敷地の居住者や地目を年代別に示したものが表1である。図2は貞享2年(1685)の『福居御城下絵図』⁽⁶⁾(図1-3)を基に、志比口と地蔵町口周辺の屋敷割を書き起こしたものである。

* 原稿受付 2022年4月22日

^{*1} FUT 福井城郭研究所

^{*2} 工学部 建築土木工学科

E-mail: kouki-i@fukui-ut.ac.jp



図 1-1 万治 2 年(1659)大火前



図 1-2 寛文 9 年(1669)大火前



図 1-3 貞享 2 年(1685)



図 1-4 正徳 4 年(1714)

図 1 城下絵図にみる志比口と地蔵町口の屋敷地 (その 1)

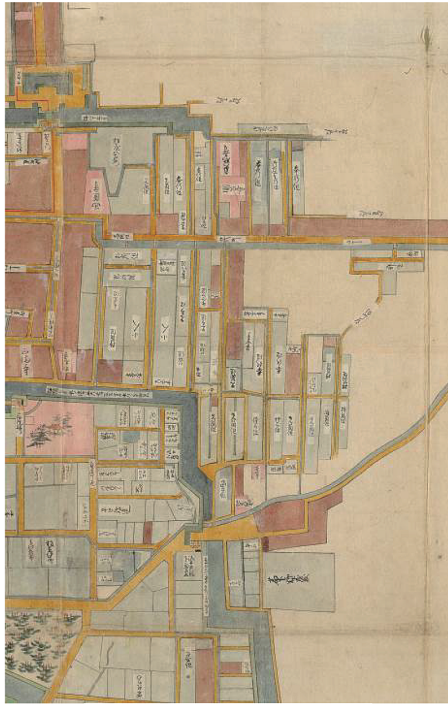


図 1-5 安永 4 年(1775)

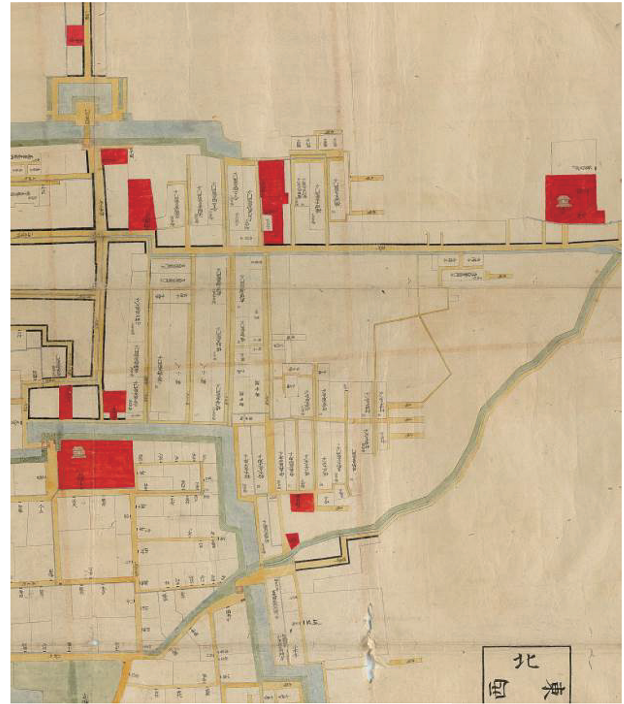


図 1-6 享和 3 年(1803)

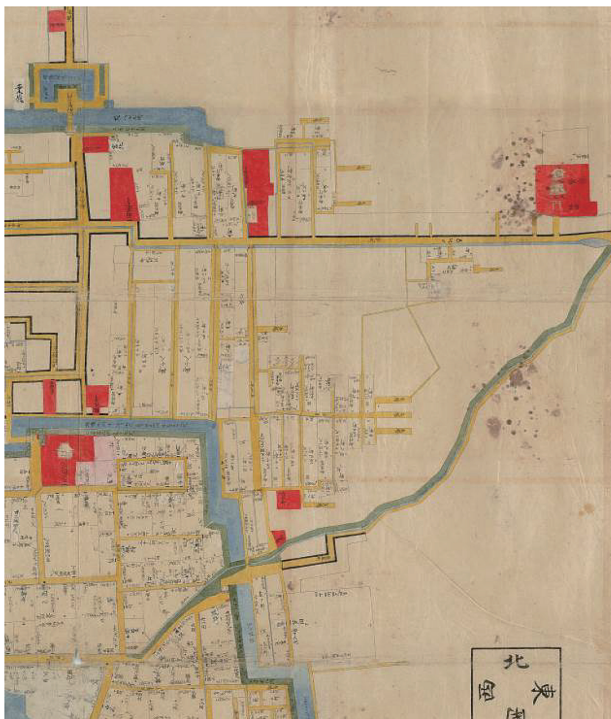


図 1-7 文化 8 年(1811)

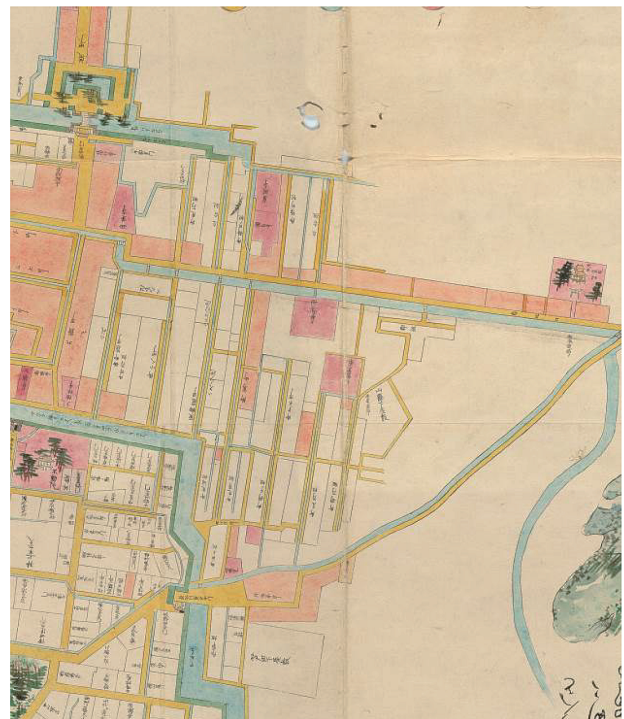


図 1-8 慶応年間(1865～67)

図 1 城下絵図にみる志比口と地蔵町口の屋敷地 (その 2)

(以上、図 1 の 8 図は松平文庫、福井県文書館保管)

志比口と地蔵町口における屋敷地について 福井城下の町口における屋敷地の研究 その5

表1 各時代における志比口と地蔵町口の屋敷地

町名	屋敷地番号	万治2年大火前 (1659)	寛文9年大火前 (1669)	貞享2年 (1685)	正徳4年 (1714)	安永4年 (1775)	享和3年 (1803)	文化8年 (1811)	慶応年間 (1865~67)
志比口 浅町	SHi-1	空地		堀江刑部右衛門 与	鈴木彦右太夫 与	奉行組	御奉行 織田半左衛門 与	御奉行 七軒	《御奉行組》
	SHi-2			堀江刑部右衛門 与	鈴木彦右太夫 与	御預所組	御奉行 織田半左衛門 与	御奉行 八軒	立合組
	SHi-3			河越宇左衛門 与	地方地	地方地	御預所 横田作太夫・梶川半兵衛 与	御預所 六軒	御預所組
	SHi-4	寺 《国昌寺》		国昌寺	国昌寺	国昌寺	国昌寺	国昌寺	国昌寺
	SHi-5			出淵平兵衛 与二軒	西尾源太左衛門 与	奉行組	上月武左衛門 与	御預所 八軒	御持弓組
	SHi-6	寺 《真照寺》		真照寺	真照寺	真照寺	真照寺	真照寺	真照寺
	SHi-7	空地		市村勘右衛門 与五軒	空地	御預所組	横田作太夫・梶川半兵衛 与	《御預所》四軒	《御預所組》
	SHi-8			市村勘右衛門 与六軒			横田作太夫・梶川半兵衛 与	《御預所》四軒	《御預所組》
	SHi-9	百姓田地		町人地	町人地	町人地	上月武左衛門 与	《御持弓》四軒	《御持弓組》
	SHi-10			出淵平兵衛 与九軒	西尾源太左衛門 与	持弓組	御持弓 上月武左衛門 与	御持弓 九軒	御持弓組
	SHi-11			出淵平兵衛 与九軒	西尾源太左衛門 与	持弓組	上月武左衛門 与	《御持弓》五軒	《御持弓組》
	SHi-12	土屋次郎兵衛 与力	土屋次郎兵衛 与	根来半兵衛 与四軒	飯沼官兵衛 与	奉行組	御奉行 今立助左衛門 与	御奉行 四軒	《御奉行組》
	SHi-13	町人地	《町人地》	榑原六郎左衛門 与二軒	秋田三五左衛門 与	先筒組	御奉行 今立助左衛門 与	御奉行 十一軒	立合組
	SHi-14	土屋次郎兵衛 与力	土屋次郎兵衛 与足軽	根来半兵衛 与十一軒	飯沼官兵衛 与	奉行組	御奉行 今立助左衛門 与	御先筒	御先筒
	SHi-15	町人地	《町人地》	町人地	町人地	町人地	町人地	町人地	町人地
	SHi-16	江川安右衛門 与力	江川安右衛門 与足軽	榑原六郎左衛門 与十一軒	秋田三五左衛門 与	先筒組	御先筒 平岡金左衛門 与	御先筒 十一軒	《御先筒組》
	SHi-17	町人地	《町人地》	町人地	町人地	町人地	町人地	町人地	町人地
	SHi-18	江川安右衛門	江川安右衛門	榑原六郎左衛門 与七軒	秋田三五左衛門 与	先筒組	御先筒 平岡金左衛門 与	御先筒 七軒	御先筒組
	SHi-19	寺 《西蓮寺》		西蓮寺	西蓮寺	西蓮寺	西蓮寺	西蓮寺	西蓮寺
御駕町	OKa-1	御小人		御駕籠者 御草履取り、御花作り40軒	小人	町人地	町人地	町人地	町人地
	OKa-2	加藤内膳 与力		芦田内匠 与力三軒	地方地	町人地	御普請奉行 武田太郎左衛門 与	《御奉行組》	町人地
	OKa-3	西尾源太左衛門 組	西尾源太左衛門 組足軽	御中間	山田又四郎 支配	先筒組	町人地	《御先筒組》	《御先筒組》
	OKa-4	高村六郎兵衛 与屋敷	高村六郎兵衛 与屋敷	空地	山田又四郎 支配	中間	中間	《中間》	《中間》
	OKa-5	林六左衛門 与屋敷	林六左衛門 与屋敷		大崎左太夫 与			《中間》	《中間》
	OKa-6	加藤内膳 与力		芦田内匠 与力四軒	大崎左太夫 与	町人地	御先弓 堀勘左衛門 与	御先弓 一軒	《御先弓組》
	OKa-7			御小人 三軒	地方地		御先弓 堀勘左衛門 与	御先弓 一軒	《御先弓組》
	OKa-8			空地	山名椿文		地方地	町人地	《御先弓組》
	OKa-9	嶋田三左衛門 与		御土蔵番	御土蔵屋敷	御土蔵番	御土蔵番	御土蔵番	《御土蔵番》
東御旗町	e-HT-1	嶋田三左衛門 与		上月八郎左衛門 組十一軒	長谷部六右衛門 与	普請組	普請奉行 武田太郎左衛門 与	普請組 九軒	《普請組》
	e-HT-2	松原八左衛門 与		松原右衛門 与八軒	大崎左太夫 与	旗組	御先弓 堀勘左衛門 与	御先弓組	《御先弓組》
	e-HT-3	松原八左衛門 与		御中間 八軒	岩上梶太夫 与	中間	旗奉行 堤安右衛門 与	旗組	御先弓組
	e-HT-4			御中間 十二軒	岩上梶太夫 与	旗組	旗奉行 堤安右衛門 与	御旗奉行 八軒	《御旗組》
	e-HT-5			御中間 十二軒	岩上梶太夫 与	旗組	旗奉行 堤安右衛門 与	御旗奉行 八軒	《御旗組》
	e-HT-6	嶋田三左衛門 与		松原右衛門 与十軒	大崎左太夫 与	普請組	普請奉行 武田太郎左衛門 与	普請組 八軒	《御普請組》
御小人町	OKo-1	御小人	御小人	御小人	御小人	小人	御小人	御小人 十八軒	《御小人組》
	OKo-2			御小人	御小人	小人	御小人	御小人 十八軒	《御小人組》
	OKo-3	御小人	御小人	御小人	御小人	小人	御小人	御小人 十八軒	《御小人組》
	OKo-4	中書様御屋敷	中書様御屋敷	中書様御屋敷	松岡御屋敷	札所組	吉田茂左衛門 与	御札所組	札所組
西御旗町	w-HT-1	吉田作右衛門 与	吉田作右衛門 与	鈴木彦太夫 組十五軒	長谷川仁兵衛 与	鳥見組	御鳥見 高畑興五左衛門 与	御鳥見 十五軒	御持筒組
	w-HT-2			中間屋敷	地方地	持筒組	御持筒 三寺興右衛門 与	御持筒 一軒	町人地
	w-HT-3	吉田作右衛門 与	吉田作右衛門 与	中間屋敷	空地	町人地	御持筒 三寺興右衛門 与	御持筒 五軒	町人地
	w-HT-4			鈴木彦太夫 組五軒	山本源左衛門 与	町人地	御鳥見 高畑興五左衛門 与	御鳥見 五軒	《御鳥見組》
	w-HT-5	多賀谷三郎左衛門 与	多賀谷三郎左衛門 与	玉枝小市郎 与十五軒	八木平六 与	御旗奉行組	御旗奉行 山田次郎太夫 与	御旗奉行組	《御旗組》
	w-HT-6			善応院	地方地		町人地	《御旗奉行組》	藤田利左衛門
地蔵町	Zi-1	熊谷又左衛門 与		飯長屋	町人地	空地	空地	空地	空地
	Zi-2			正龍寺	正龍寺	蓮照寺	唯有軒	唯有軒	《唯有軒》
	Zi-3			御中間	町人地	町人地	町人地	町人地	町人地
	Zi-4			地蔵堂	地蔵堂	地蔵堂	地蔵堂	地蔵堂	地蔵堂
	Zi-5	熊谷又左衛門 与	熊谷又左衛門 与	西尾甚兵衛 与十七軒	周防伊左衛門 与	御留守居 組	御留守居 前波忠兵衛 与	御留守居 七軒	御留守居組
	Zi-6	高村太左兵衛 与	高村六郎兵衛 与	津田源之丞 与二十軒	川瀬次太夫 与	先筒組	御先筒 鈴木甚十郎 与	《御先筒》	御先筒組
	Zi-7	高村太左兵衛 与		山石		空地			御先筒組
	Zi-8	西尾源太左衛門 組	西尾源太左衛門 組	地方地	地方地	地方地	御先筒 鈴木甚十郎 与	《御先筒》	地方地
	Zi-9			林又左衛門 与二十軒	朽屋平右衛門 与	先筒組	御先筒 雨森藤四郎 与	御先筒 十二軒	御先筒組
	Zi-10	空地	空地	高田金太夫与十軒	落合養兵衛 与	持弓組	御持弓 堀平太夫 与	御持弓 八軒	御持弓組
	Zi-11			高田金太夫 与九軒	落合養兵衛 与	持弓組	御持筒 堀平太夫 与	御持弓 九軒	御持弓組
	Zi-12			所木彦太夫 与八軒	長野八太夫 与	先筒組	御先筒 生駒五左衛門 与	御先筒 九軒	御先筒組
	Zi-13			所木彦太夫 与十軒	長野八太夫 与	先筒組	御先筒 生駒五左衛門 与	御先筒 八軒	御先筒組
奥町	OKu-1	空地	林六左衛門 与力	丹波八左衛門 与十五軒	堀十兵衛 与	持筒組	御持筒 村田十太夫 与	御持筒 六軒	御持筒組
	OKu-2			丹波八左衛門 与十六軒	堀十兵衛 与	持筒組	御持筒 村田十太夫 与	御持筒 六軒	《御持筒組》
	OKu-3			大谷儀右衛門 与六軒	鈴木忠右衛門 与	奉行組	御奉行 河合助太夫 与	《御奉行》	《御奉行組》
	OKu-4			大谷儀右衛門 与九軒	鈴木忠右衛門 与	奉行組	御奉行 河合助太夫 与	御奉行 六軒	町人地
	OKu-5			御丈堂	御手木 与	御手木者	御手木 与	《御手木》	御手木
外地蔵町	S-Zi-1	町人地	町人地	町人地	町人地	町人地	町人地	町人地	町人地
	S-Zi-2	町人地	町人地	町人地	町人地	町人地	町人地	町人地	町人地
	S-Zi-3	穴生	町人地	芦田内匠 下屋敷	芦田右衛門 下屋敷	芦田下野 下屋敷	芦田右衛門 下屋敷	芦田 下屋敷	芦田 下屋敷
	S-Zi-4	浅井十郎左衛門 与	浅井十郎左衛門 与力	西尾甚兵衛 与	中間	口ノ者	空地	空地	笹川
	S-Zi-5			空地	笹川庄左衛門	空地	笹川	笹川	佐伯彦ノ
	S-Zi-6	津田源之丞 与	空地	空地	土蔵屋敷		平瀬	佐伯	《作事組》
	S-Zi-7			野田喜左衛門	野田仁右衛門		御留守作事 小木藤右衛門 与	空地	《作事組》
	S-Zi-8			津田源之丞 与力	荒川三郎太夫 与	水野藤兵衛 与力	御留守作事 小木藤右衛門 与	御留守居 作事	御先作事組
	S-Zi-9	S-Zi-4と同じ	S-Zi-4と同じ	土屋甚五兵衛 与	本多十郎兵衛 与力	作事 組	御先作事 真田五郎兵衛 与	御先作事 十軒	御作事組

*1: ・・・城下図の居住者名や地目の剥がれを示す。*2: 《 》内の名称は、城下図の明記はなく、筆者の判断で記載した。



図2 貞享2年の志比口と地藏町口の屋敷割 (貞享2年『福居御城下絵図』の起こし図)

2.1 志比口付近の町名とその位置

図2に示すように、志比口付近にある5つの町は、北陸街道から東に延びる勝山街道の両側にある。街道を挟んで北には志比口筏町があり、南には東から御駕町、東御旗町、御小人町、西御旗町の4町⁽⁷⁾が並んでいる。4町ともに勝山街道に直交する南北方向の通り(4筋)の両側に屋敷地が配されている。

2.1.1 志比口筏町の屋敷地

万治2年の図1-1をみると、志比口筏町の屋敷地は11筆みられる。町の西部にある江川安右衛門(SHi-18)の屋敷地のほか、土屋次郎兵衛(SHi-12・14)や江川安右衛門(SHi-16)など福井藩の上級武士に仕える与力の組屋敷地3筆、3つの寺地と地子地1筆および町人地がみられる。

26年後の貞享2年の図1-3では、これまでの屋敷地が細かく分筆され、16筆に増加している。例えば、寛文9年(1669)の図1-2では空地であったSHi-1～3の屋敷地が堀江刑部右衛門家と河越宇左衛門家の与力屋敷になり、百姓田地であったSHi-9～10が分筆されて町人地と出瀬平兵衛家の与力屋敷になっている。

16筆のうち、国昌寺や真照寺など3寺院と町人地以外はすべて与力の組屋敷であることから、貞享2年時の志比口筏町の屋敷地の大部分を組屋敷が占めていたことが指摘できる。

正徳4年(1714)の図1-4をみると、貞享2年の時点で市村勘宇衛門家の与力屋敷であったSHi-7・8が空地に替わっている。これについては、貞享3年の大法によって、これまで上級武士に従仕していた与力が削減されたためと考えられる。

その後、町の大部分を占めていた組屋敷は享和3年(1803)には17筆に増えている。17筆の居住者はすべて御奉行組や御先筒組⁽⁸⁾の与力和記されており、志比口筏町は江戸時代を通して与力や足軽らの組屋敷のほか、寺院や町人地も配されていたことが認められる。

2.1.2 御駕町の屋敷地

東端にある御駕町の屋敷割の初見は、万治2年の大火前の図1-1である。これによると、御駕町の屋敷地は7筆で、通りの東側に御小人(OKa-1)の組屋敷のほか、加藤内膳家(OKa-2)と西尾源左衛門家(OKa-3)の与力や足軽の組屋敷が3筆確認できる。一方、西側には高村六郎兵衛家(OKa-4)、林六左衛門家(OKa-5)や嶋田三左衛門家(OKa-8)などの与力屋敷が4筆みられる。7筆はすべて福井藩の上級武士に仕える与力の組屋敷であり、町人地や寺院は一切みられない。

その後、屋敷地は貞享2年までにOka-6とOka-8がそれぞれ分筆して一旦は9筆に増加するが、安永4年(1775)には2筆にまで減っている。また、勝山街道沿いのOka-1とOka-2、Oka-7～9が組屋敷から町人地に替わっている。

慶応年間の図1-8をみると、Oka-1とOka-2は町人地のままであるが、それ以外のOka-3～Oka-9は再び、御先弓組⁽⁹⁾や御土蔵番組などの組屋敷になっている。したがって、御駕町は万治2年時には7筆すべて与力らが居住する組屋敷であったが、時代とともに組屋敷が減少し、幕末の慶応では町人地と組屋敷が混在する町に変わったことが指摘できる。

2.1.3 東御旗町の屋敷地

御駕町に西隣する東御旗町の屋敷地は、万治2年の図1-1をみると、通りの東側に嶋田三左衛門家(e-HT-1)と松原八左衛門家(e-HT-2)の与力屋敷が南北に配され、西側には松原八左衛門家(e-HT-3)の与力屋敷と明地が確認できる。その後、東御旗町の屋敷地は、貞享2年までにe-HT-1以外の屋敷地は分筆して6筆に増えている。

居住者をみると、6筆中4筆が上月八郎左衛門家(e-HT-1・6)と松原右衛門家(e-HT-2・5)など上級武士の与力屋敷であるが、一部中間屋敷(e-HT-3・4)もみられる。

上級武士の与力屋敷が占める状態は、正徳4年まで続いているが、安永4年以降は福井藩の普請組、御旗組や御先弓組などの組屋敷が多く配されている。すなわち、東御旗町は江戸時代を通して常に、下級武士が居住する組町であったことが認められる。

2.1.4 御小人町の屋敷地

御小人町は東御旗町の西側にある。万治2年の図1-1をみると、前述した御駕町や東御旗町とは異なり、御小人(OKo-3)の組屋敷のほか、勝山街道に面して中書様御屋敷(OKo-4)が確認できる。中書様とは、福井藩3代藩主松平忠昌の長男の昌勝で、正保2年(1645)に街道沿いのOKo-4に設けられている⁽¹⁰⁾。

正徳4年の図1-5をみると、OKo-4は中書様御屋敷から松岡藩の福井屋敷に替わっている。これは、松平昌勝が慶安2年(1648)に分知して松岡藩主となったことに起因し、御小人町にあった昌勝の屋敷がそのまま松岡藩の福井屋敷になったと判断できる。なお、松岡藩は享保6年(1721)に廃藩となり、その所領は福井藩に併合されている。

その後の安永4年の図1-5をみると、Oka-4の松岡藩の福井屋敷は札所組の組屋敷になっている。つまり、松岡藩福井屋敷であったOka-4は、享保6年の松岡藩の廃藩とともに取り払われ、跡地に札所組の組屋敷に替わったとみてよい。一方、町名である御小人組の組屋敷は、万治2年から慶応まで存在している。

2.1.5 西御旗町の屋敷地

万治2年の図1-1によると、西御旗町は西端に位置しており、御駕町や御小人町同様、南北の通りの両側に屋敷地が配されている。通りの東側には吉田作衛門家(w-HT-1)の与力屋敷があり、西側には多賀谷三郎左衛門家(w-HT-5)と吉田作衛門家(w-HT-3)の与力屋敷が確認できる。いずれも福井藩の上級武士に仕える与力の屋敷地で、この状態は寛文9年まで続いている。

貞享2年の図1-3をみると、3筆は分筆して6筆に増加している。居住者もすべて入れ替り、東側のw-HT-1とw-HT-3は吉田作衛門家の与力屋敷から鈴木彦太夫家の組屋敷と中間屋敷になり、西側のw-HT-5は多賀谷三郎左衛門家の与力屋敷から玉枝小市郎家の与力屋敷と善応院の敷地に替わっている。

6筆の状態は慶応年間まで続くが、貞享2年以降は地方地や町人地になるなど頻繁に屋敷替えが行われており、慶応には御鳥見組⁽¹⁾や御旗奉行組の組屋敷のほか、町人地(w-HT-2・3)と藤田利左衛門(w-HT-6)の屋敷地になっている。

以上、西御旗町についても志比口筏町や御駕町と同様に、組屋敷と町人地および武家屋敷地が混在する町であったことが指摘できる。

2.2 地蔵町口付近の町名とその位置

地蔵町口は、福井城下の下級武家町(鷹匠町、天草町)から奥平門を抜けて、勝山に通じる街道口にあたる。街道の北側に地蔵町と奥町があり、南側に外地蔵町がある(図2参照)。

2.2.1 地蔵町の屋敷地

地蔵町の屋敷割の初見も、万治2年の大火前の図1-1である。図1-1をみると、東から熊谷又左衛門家(Zi-1~4)、高村太左衛門家(Zi-6・7)と西尾源太左衛門家(Zi-8)らの与力屋敷がみられる。その後、貞享2年までに北東寄りの一画に新たに南北方向の通りが5筋設けられ、屋敷割は大きく変化している。

貞享2年の図1-3によると、5筋の通りの両側には林又左衛門家(Zi-9)をはじめ、高田金太夫家(Zi-10・11)や所木彦太夫家(Zi-12・13)など5筆の福井藩の上級武士に仕える与力や足軽の組屋敷がみられる。南東寄りの一画も、これまでの熊谷又左衛門家(Zi-1~4)の与力屋敷が6筆に分筆され、新たに中間屋敷や与力屋敷のほか、正龍寺(Zi-2)や地蔵堂(Zi-4)の敷地になっている。

表1に示すように、地蔵町は貞享2年までに増加した屋敷地12筆のうち8筆が組屋敷であること、町内に町人地や地方地および寺地が存在することなど屋敷割の状況は慶応まで変化していない。

以上のように、地蔵町は万治2年時においては5筆すべて与力や足軽が居住する組屋敷であったが、時代とともに組屋敷の数が減り、慶応には組屋敷8筆のほか、町人地や地方地および寺院が混在する町に変わったことがわかる。

2.2.2 奥町の屋敷地

地蔵町に北隣する奥町の屋敷割が最初に確認できるのは、貞享2年の図1-3である。図1-3をみると、新たに屋敷割された南北方向の通りの両側に丹波八左衛門家(Oku-1・2)と大谷儀右衛門家(Oku-3・4)の与力屋敷と御丈堂(Oku-5)の敷地が確認できる。その後、正徳4年までにOku-5が御丈堂から御手木組の組屋敷に替わり、5筆すべて組屋敷になっている。組屋敷に替わった5筆は、慶応まで屋敷替えされずに組屋敷のままである。

2.2.3 外地蔵町の屋敷地

外地蔵町は地蔵町の南方に位置している。万治2年の図1-1をみると、屋敷地は街道沿いと南の掘際にあるが、街道沿いはすべて町人地である。

一方、掘際の屋敷地は、万治2年以降、上級武士の与力や足輕の組屋敷と武家屋敷が混在している。なかでも、東端の屋敷地（S-Zi-3）には、福井藩の最上級家格である高知席の芦田内匠家の下屋敷が置かれている。さらに、江戸時代を通して町内に笹川家や佐伯家など複数の武家屋敷地が配されていることも、これまでみてきた志比口の5町や地蔵町、奥町では確認できず、外地蔵町の特徴である。

3. 万治2年から慶応までの志比口、地蔵町口における屋敷地の数

これまで述べてきた万治2年の大火前から慶応までの志比口5町（志比口筏町、御駕町、東御旗町、御小人町、御西旗町）と地蔵町口3町（地蔵町、奥町、外地蔵町）の屋敷地の筆数を表2に示す。

表2 各時代における志比口・地蔵町口の屋敷地の筆数

町名	年代 屋敷地	単位：筆							
		万治2年 (1659)	寛文9年 (1669)	貞享2年 (1685)	正徳4年 (1714)	安永4年 (1775)	享和3年 (1803)	文化8年 (1811)	慶応年間 (1865~67)
志比口筏町	屋敷地	11	11	16	15	15	17	17	17
	武家地	1	1	0	0	0	0	0	0
	組屋敷	3	3	13	10	10	14	14	14
	寺社地	3	—	3	3	3	3	3	3
	町人地	●	●	●	●	●	●	●	●
	地方地	1	—	0	1	1	0	0	0
	空地	2	—	0	1	0	0	0	0
御駕町	屋敷地	7	6	9	9	2	6	7	7
	武家地	0	0	0	2	0	0	0	0
	組屋敷	7	3	6	5	2	5	6	7
	寺社地	0	0	0	0	0	0	0	0
	町人地	—	—	—	—	●	●	●	●
	地方地	0	0	1	2	0	1	1	0
	空地	0	—	2	0	0	0	0	0
東御旗町	屋敷地	4	4	6	7	7	7	7	7
	武家地	0	0	0	0	0	0	0	0
	組屋敷	4	0	6	6	7	7	7	7
	寺社地	0	0	0	0	0	0	0	0
	町人地	—	—	—	—	—	—	—	—
	地方地	0	0	0	0	0	0	0	0
	空地	0	—	0	1	0	0	0	0
御小人町	屋敷地	3	3	4	4	4	3	3	3
	武家地	1	1	1	1	0	0	0	0
	組屋敷	2	2	3	3	4	3	3	3
	寺社地	0	0	0	0	0	0	0	0
	町人地	—	—	—	—	—	—	—	—
	地方地	0	0	0	0	0	0	0	0
	空地	0	0	0	0	0	0	0	0
西御旗町	屋敷地	3	3	6	6	4	5	6	4
	武家地	0	0	0	0	0	0	0	1
	組屋敷	3	3	5	3	4	5	6	3
	寺社地	0	0	1	0	0	0	0	0
	町人地	—	—	—	—	●	●	—	●
	地方地	0	0	0	2	0	0	0	0
	空地	0	0	0	1	0	0	0	0
地蔵町	屋敷地	6	6	12	11	11	11	11	12
	武家地	0	0	1	0	0	0	0	0
	組屋敷	5	3	8	7	7	8	8	8
	寺社地	0	0	2	2	2	2	2	2
	町人地	—	—	—	●	●	●	●	●
	地方地	0	0	1	1	1	0	0	1
	空地	1	1	0	0	2	1	1	1
奥町	屋敷地	1	2	5	5	5	5	5	4
	武家地	—	0	0	0	0	0	0	0
	組屋敷	—	1	4	5	5	5	5	4
	寺社地	—	0	1	0	0	0	0	0
	町人地	—	—	—	—	—	—	—	●
	地方地	—	0	0	0	0	0	0	0
	空地	1	1	0	0	0	0	0	0
外地蔵町	屋敷地	3	3	7	7	6	7	7	7
	武家地	1	0	2	4	1	3	3	3
	組屋敷	2	2	3	3	4	3	2	4
	寺社地	0	0	0	0	0	0	0	0
	町人地	●	●	●	●	●	●	●	●
	地方地	0	0	0	0	0	0	0	0
	空地	2	1	2	0	1	1	2	0

*1：町人地については、有無で判断している。

3.1 志比口筏町、御駕町、東御旗町、御小人町、西御旗町の屋敷地の数

表2のように、志比口筏町の屋敷地は万治2年までに屋敷割された11筆のうち、3筆が組屋敷である。3筆の組屋敷は貞享2年以降、正徳4年までに13筆に増加し、その後は10筆～14筆の間で推移している。その他、寺社地は万治2年～慶応まで3筆のまま変わらず、町人地は江戸時代を通して存在している。

御駕町の屋敷地は、万治2年の7筆が貞享2年には9筆に増えている。このうち、組屋敷は万治2年においては7筆すべて組屋敷で、それ以降も組屋敷の割合が高く、正徳4年には5割、正徳4年～慶応にかけては7割～8割を占めている。組屋敷以外は貞享2年以降、地方地が1筆～2筆と町人地がみられる。

東御旗町の屋敷地は、万治2年の4筆が貞享2年にかけて6筆に増加している。その後、6筆は安永4年にかけて7筆に増加し、慶応まで変わっていない。これらの屋敷地はすべて組屋敷であり、他の町に配されている武家地や町人地は、江戸時代を通して一度も確認できない。

御小人町の屋敷地は、万治2年～慶応まで3筆～4筆で推移している。御小人町もやはり組屋敷が多く、それ以外は正保2年～享保6年の間に、松平昌勝の屋敷（後、松岡藩福井屋敷）が置かれていただけである。

西御旗町の屋敷地は、万治2年時の3筆が貞享2年までに6筆に増加している。西御旗町の屋敷地も組屋敷が9割を占めており、組屋敷以外は寺社地と町人地が配されている程度である。

3.2 地蔵町、奥町、外地蔵町の屋敷地の数

表2に示すように、地蔵町の屋敷地は万治2年までに屋敷割された6筆が、貞享2年までに12筆に増加している。12筆の内訳は、組屋敷が最多の8筆で、次いで寺社地が2筆、武家地と地方地がそれぞれ1筆ずつある。このうち、8筆の組屋敷は正徳4年～安永4年にかけて一旦は7筆に減少するが、享和3年以降は8筆に戻っている。

一方、貞享2年までに配された2筆の寺社地は慶応まで増減はなく、町人地と地方地についても慶応まで配されていたことが認められる。対して武家地は正徳4年以降、1筆もみられない。

奥町の屋敷地は万治2年時の1筆が貞享2年までに5筆に増えてからは、慶応まで増減は認められない。しかも、寛文9年～貞享2年の間に寺社地が1筆あるだけで、それ以外はすべて組屋敷である。

外地蔵町の屋敷地は万治2年の3筆が、貞享2年には7筆まで増加し、組屋敷3筆のほか、武家地2筆と町人地が混在している。外地蔵町の屋敷地については、前述した志比口の5町と地蔵町や奥町と違い、幕末の慶応の時点で武家地の数が組屋敷の数より多いことが他の町には類例がなく、外地蔵町の特徴である。

4. おわりに

以上、万治2年の大火前から慶応までの志比口と地蔵町口の屋敷地の位置や居住者について、城下図を用いて検討した結果、以下のことが指摘できる。

- (1) 志比口付近には、志比口筏町、御駕町、東御旗町、御小人町、西御旗町の5町があり、いずれも江戸時代を通して与力や足軽が居住する組町である。
- (2) 志比口筏町、御駕町と西御旗町の3町は、町の大半を組屋敷が占めている。但し、時代によっては一部、町人地や寺院および武家屋敷地が配されている。
- (3) 東御旗町は、万治2年の大火前から慶応まですべての屋敷地が組屋敷である。
- (4) 御小人町も町の大部分を組屋敷が占めているが、正保2年～享保6年までの76年間、北寄りの一画に松平昌勝（松岡藩初代藩主）の屋敷（後、松岡藩福井屋敷）が置かれている。
- (5) 地蔵町口付近には、地蔵町、奥町、外地蔵町の3町があり、3町とも与力や足軽ら下級武士の居住区である。
- (6) 地蔵町も組町であるが、志比口筏町や御駕町同様、町人地や寺院および武家屋敷地が配されている時期もみられる。
- (7) 奥町についても屋敷地のほとんどが組屋敷であるが、寛文9年～貞享2年の間、御丈堂が置かれている。

- (8) 外地蔵町は他の町とは違い、最上級家格である高知席の芦田内匠家の下屋敷が置かれていること、幕末には武家地の数が組屋敷より多いことなどが認められる。これは、外地蔵町が東北方から武家地に入る町口にあたるため、下級武士とともに高知席の下屋敷を配して警衛にあたっていたと考えられる。
- (9) 志比口と地蔵町口の屋敷地は、既報の加賀口や明里口で明らかにした貞享3年の大法以降、組屋敷が減少して中級武士の屋敷地が増加する傾向は認められず、2つの町口は江戸時代を通して、常に下級武士が居住する組町であったことが指摘できる。

注

- (1) 福井七口と呼称されているが、実際は小さい町口を含めると13口ある。町口については、伊豆蔵庫喜、吉田純一、“福井七口について”，日本建築学会大会梗概集（1995），pp.221-222，で詳しく報告している。
- (2) 組屋敷は、上級武士に従仕する与力や足軽などの組の者に属する下級武士に与えられていた屋敷で、敷地内に数軒が纏まって居住している。本研究では通りや路地を境に屋敷割されている組屋敷に関しては、武家屋敷地と同様、1筆とみなしている。
- (3) 伊豆蔵庫喜、多米淑人、吉田純一，“福井城下の町口における屋敷地の研究 その1～4”，日本建築学会大会学術講演梗概集（2019-2022）。なお，“福井城下の町口における屋敷地の研究 その4”，については現在、投稿中である。
- (4) 貞享3年(1686)に福井藩は25万石に半知されている。その際、多くの上級武家の家禄も半減され、城下周縁部にあった上級武士に従仕する与力や足軽の組屋敷の数も激減している。
- (5) 8図はすべて、松平文庫、福井県文書館保管。
- (6) 前掲(5)と同じ、松平文庫、福井県文書館保管。
- (7) 下中邦彦、福井県の地名、(1981)、p.252、平凡社、の記述によると、御駕町は、福井藩の供頭支配下で藩主に仕えた駕之者や草履取りが居住する組町である。東西御旗町は、藩の飛脚を勤める御旗奉行支配下の組町である。御小人町も御駕町同様、供頭支配下の組町である。
- (8) 御先筒組（おさきづつぐみ）は、鉄砲足軽を編制した部隊で、平時は城門や城下に入る町口の警衛にあたっている。
- (9) 御先弓組（おさきゆみぐみ）は、弓足軽を編制した部隊で、平時は城門や城下に入る町口の警衛にあたっている。
- (10) 前掲(7)と同じ、福井県の地名、p.252の記述によると、西御旗町と御小人町に挟まれた一画に、正保2年(1645)から中書様（松平昌勝）の屋敷（後、松岡藩福井屋敷）が置かれていたが、享保6年(1721)の廃藩とともに取り払われ、跡地に御札所奉行支配下の御札所組町が置かれたことがわかる。なお、本稿では中書様屋敷の所在地は、御小人町に含み考察している。
- (11) 御鳥見組（おとりみぐみ）は、鷹狩を行う鷹狩場の管理や鷹狩の準備にあたっていた。平時は鷹狩場における鳥の生息状況を監視してより獲物の多い場所へと導く役割を担っていた。

（2022年8月4日受理）